

鶯花徑

泉鏡花作

一

松は、あれは、――彼の山の上に見えるのは、確  
にあれは一本松。晴れた夕暮の空高く、星を頂いて  
立つてるが、枝も葉も何もない、幹には刻々の入つ  
て居る裂け目が判然と見える。

何時だつたか、其の焼けたのは、冬、凧の吹いた  
晩。其頃は一樹、兀山の端に麓の町へおつかぶさつ  
て茂つて居て、北の方、熊笹、根笹、萱、薄の谷へ、  
眞直に垂れて居た。其の名高い枝は、長さが二十間  
あつたといふ。根上りの松で、土蜘蛛の足のやうに  
蟠まつた弓形の根の下を、潜り／＼して堂々巡をし  
た、私達幼いものは、また其根の上へ攀上つて、見  
上げるやうな枝の下に五人と七人、目白押をして留  
まりながら、巽の方、城の中を遙に小さく瞰下して、  
一の丸の堀端なる、鐵砲庫の傍の、平坦な空地で、  
聯隊の兵士が演習をして居るのを蟻の湧くやうに見  
た。足の下では毛氈を敷いて、女まじりに吸筒を開

いて流行唄を唄つて居ることもあつた。夜は、ちやうど三里ばかり隔つた處から海になつて居る其沖の船の目印になるといつて、梢に常燈明が灯されたくらゐ、市の中央だといふ、青いペンキ塗の大橋の上から正面に見える愛宕の一本松といつて、聞えた常磐木だつたのが、――其の風の暗い晩、十萬軒の屋根も、窓も、北向の障子は残らずあかりがさして、辻巷をあかるくして燃え出した。

米が高くつて一揆が起る、其の暗號だといつて、推返すやうに騒いだけれど、呐喊の聲も聞えなかつた。夜が更けて森とすると、松脂が煮えるチウ／＼といふ響に、枝の裂けてばち／＼と炭の芣るやうな音が、山から山へ鳴り渡つた。

ちやうど病氣でおよつていらつしやつた母様が私を抱いて起きて出て、二階の北窓を開けなすつた。束髪、毛のさきのもつれたのが、膝に抱かれた其坊やの頸にひや／＼として溢れた。其時眞黒な襟をつけた水色の薄い着物で、絶々しう、風のすさんでる眞暗な外へ、氣高い顔をお出しなすつた。唯見ると、

頂いたゞきに小ちひさな松明たいまつ、まるで炎ほのほなのが中空なかぞらうに燃上もえあがつて、左右さいうの山やまの土つちは赤あかく、うらの峰みねは眞黒まつくろで、麓ふもとの熊笹くまざさの枯かれたのもあり／＼と見みて取とられたあかるい中なかを、手ての細ほそい、白しろいので指ゆびさして、――（坊ぼうや、きれいだね。）とおつしやつた。――

――松まつは、あれは、確たしかにそれと、鷺わしの片翼かたつばさを擴ひろげて植うゑたやうな、いまは枝えだも葉はも何なんにもない根ねひろがりに幹みきの裂さけ／＼になつたのを、仰あふいで星ほしの下したに見みた。

………と思おもひました。

爾時そのときフと心着こころづくと、然さうすると、坊ぼうやは片手かたてを擧あげて、人ひとの胸むねとおもふあたりで曳ひかれながらい兩側りやうがはに森もりのある薄暗うすくらい小路こみちを歩あるり居ゐたので。

吃驚びっくりしたけれど、誰たれが手てを曳ひいて、何處どこへ行ゆかうとするのか、其人そのひとの顔かほをうつかり見みようとはしなかつた。これは大抵たいてい其誰そのたれであらうといふことを察さつし得えられたからではない、餘あまり思おもひ懸がけぬことではあり、實際じつさい、いま氣きが着ついて恚かうしてこんな場合ばあひにある其それが眞個ほんとうなのか、夢ゆめなのか、それから忘わすれて居ゐるのか、

ぼんやりして分わからなかつた故せもあり。．．．．  
また、何どの道みちかうなつた上うへは、假たとひ令ひ、私わたしの手てを曳ひ  
いて居ゐるものが、どんなに恐こはい、邪じゃ慳けんな、殘ざん酷こくなも  
のであつたにしろ、振ふり離はなして遁にげようといふことは  
出で來きないものとあきらめても居ゐたのらしい。

何故なら、恚うして一本松を見て、フと氣が着いた其以前は、何を、何處に、何うして居たのか、些も思出せないほどに、魅入つて此處まで連れて來た、――その位な力を持った鬼だものを。

あわくツて顔を見て、よし、朱盆の様な口を開いて針を植ゑたやうな齒を見せられたつて、たゞ、しやうのないまで恐しい思をする、それだけ損、あせつたつて、もがいたつて、この小な手と、この足で、とても叶ひツこはないとあきらめた、ぢやありませんか。

だから、手を曳いてるものゝ顔を見ようとはしなかつた。顔は見ないで、また元の松の木のあたりを見た。

まつたく違ひはない。元山の頂はハヤ暗くなつて居たけれど、峰裏から谷間を上らうとする出汐の月のあかりがさして、段々薄くなつて消えて行く晴れた天の淺葱色に連なつて、バツサリ水と油と分れたやうに山の端で區ざりが立つ。其の眞中を突きさして、

彼の鷲の片翼が翫つて居る。根ざは少し離れた處に、  
小さく見えて鳥居が一個。私の故郷でかういふ景色  
は葦、鼓草、緋桃の盛で、日中はあつたかいが、夕  
越ると薄ら寒い、三月の末から四月へかけて天氣が  
續く時のかはらぬ眺望で。

いつも家にかつた鶏を、とやに入れようとしては  
あゝいひながら庭中を追駈けまはして、ほつと呼  
吸をつく時に仰いで見た景色とかはならない。左様だ、  
舊居た自分の家は、今歩行いて居る處ではもう通越  
したのでとさう思つた。

目を注ぐと、左側に二軒並んで小店がある。見覺  
えたに違ひなく、一軒は花屋で、もう店の戸は閉ま  
つて居るが、雨戸の外に花桶に密をさしたのが置い  
てあつた、密の葉は枯れたのが多く、其枯れた葉は  
白い裏が見えて、桶の手に凭れかゝつて居る。

鄰は駄菓子屋で、こゝはまた姫糊だの、草鞋だの、  
荒物を商ふ家で、店の暗いのに灯もともさず、納戸  
の障子を閉めたなかに人の居る氣勢がした。あかり

が赤く、煤ぼつた障子の隙間から洩れて、棒のやうに一條店を照らしたなかに、草鞋がぶらりと懸つて居た。

聲をかけて飛込まうか。此の家は癩筋だつていふから止した。

誰かは矢張り手を曳いて、私が彼處此處見て居る間も休まないで前途へ行く、――何處へ連れて行くのかな。

覺えた店も二軒あり、道の兩側からおつかぶさつた樹立の状、石塊澤山な路の様子、自分の家から、二町ばかり隔つて居る處に違ひないらしい。

果してそれだと、此邊は御寺澤山な處で、一本松の下にあたる窪ツ地の、鶯谿といふのである。

ツイ此さきに、左側に本像寺といふのがある筈、赤門の鐵網のなかに矢大臣が控えておいでだ。和尚様は算術の上手な人で、法用の相談に行くと、直に十露盤を出してあたつて見せるといつて、皆悪くいふけれど、小兒たち私なんぞ、八算九々を教はりに行

つたことがあると思ひ出すと、来た、．．．．．  
其御寺の前になつた。足許も暗くなつて御寺の門は  
閉つて居る。

左なのは、むづかしい顔をして居るからあまり好  
かないので、つかまつて背伸をして、さうしてあの  
鐵網の中を覗くと、優しい眼の、右の方を一寸見る  
と、暗い中に顔があつたが、額も眉も分らないで、  
此時活きてるやうに微笑んだ其口許が懐しい。

「まあ、」

昵と視ると、ガツタリ鐵網戸の中で動いたやうな  
氣がしたから、嬉くツて、飛んで行かうとしたが、  
曳かれた手は放れなかつた。

「不可ませんよ。」

引戻して、誰かかのは、しやくるやうな、小突く  
やうな、そんな邪慳なのぢやあなかつたけれど、や  
さしくつて振もぎられない力があつた。

が待て、恚うだまして置いて、私を仰向かせて、  
其の恐しい顔を見せて、慰まうといふのであらう。

(不可ませんよ、)といつた聲も、考へて見ると  
聞いたことのない、故と深切らしい聲だつた。

離れようと思つて、一ツ引いて見た。放さないか  
らまた引いた、ぐツと引張る！ あたまが疼くなり、  
耳がぐわツといつて取られて居る手に熱さを感じた。  
ふら／＼とする身體をあせつて、

「嫌 嫌」

「あれ、またはじまりましたか。」

爾時手が放れた。すかさず摺り抜けようとした身體が躍つて、足が上つたと思ふと、もう何も見えなくなつた。坊やの切ない顔は、ほとぼりのある、すべツこくツて薫の良、しかも冷々として爽かな白いもので包まれた。引占めた誰かゞ乳のあたりへ顔をば抱寄せたやうである。

「可哀相にねえ、」ツて、すきな口をきいたなと思ふと、くツついて頬ぺたから身體中の血を吸はうとするのが解つたから、一度は餘り恐いので何にでも犇と縋らうと思つたけれど、氣が着いて止めにした。さうして突退けて、火のやうな唇から放れようとして、ふら／＼する足を踏張つて両手をしつかり、精一杯、しつかりあて／＼と胸と思ふあたりをむかうへ突いた。綿をつかねたやうな胸のなかへふるへながら指が沈む。

「あれ、」  
プツリと切れたやうに、熱した唇であらう、血を吸ふものは放れたけれど、背を抱いた手にはます／＼力が入つて、引締められたのか、胸に挟つた手は

折れまがるやうで疼くてならぬ。

「痛いよ、痛いよ。」と、口惜しかつたけれど口へ出して低聲でいった。

「落着いておいでなさい、ね、しつかりするんですよ、良い兒だからね、可ござんすか。」といつて、身體をゆるめてくれた。で、ぴつたりおつかぶさつてた白い衣から顔が放れる。

向直つて兩手を膝に垂れた。ほつといきを吐いて峰を仰ぐと、月が鷲の翼にかゝつて光つて居た。

これで夢がさめたやうになつて、おなじ御寺の門の前にあるのが知れた。

また驅け出さうとしたけれど、既にもとの通り手を取られて居るのに氣がついて、  
．．．．．  
情ない。

いまわづかのあひだ、母様に抱かれたのと思つたやうでもあるけれど、違つた。あの矢張り誰かゞつかまへて居たのである。助けちやあお呉でなかつたと傍を覗くと、眞暗で矢大臣は手さきも分らない。

但たゞ鐵網戸かなあみどの組合くみあはせた龜甲形きつかふがたの銅線はりがねが一ツ一ツ判然はつきりと目めに留とまる。

心細こころほそくツて俯向うつむいてると、白しろい手てが背後うしろから出でて、

轟とんもくやうな坊やばうの胸むねの動悸どうきを静しづかに撫なでさげた。

さすつて頤あごのあたりへ來きたが、氣きが着つかず油斷ゆたんして居ゐるらしかったから、思切おもひきつて喰くひついた、前齒まへばに惡魔おにの指ゆびが力ちからチリとあたる。

#### 四

其まゝ不思議に手を動かさなから、俯向いて瞳を寄せて、――白魚のやうな紅さしに指環を一個嵌めて居る。私の齒は、其の彫刻した鳥の嘴がついばむで居る木の實に擬へた小さな紅寶石をくはへて居たのをきつぱり見た。

時に耳のあたりを吹いて、爽な風が一渡り、頬の吸はれたあとに冷々として染みる。口惜かつたからも一度と思つたけれど、指が細くつて、花片で出来るやうだから齒をあてると血が出さうで痛々しい。あまりしをらしいから鬼の手だと知つてながら止した。

放すと、おとなしく其手をうしろへ引いたので、鳥の喙も紅寶石も頭のうしろあたりで消えたやう。

すぐにまた手を引いて、

「おとなしくしておいでなさい。ね、もう少しだから。」

勝手に何處へでも連れておいでなと、やりばなし

に伴ともなはれる。心こころぢやフテながらも、足あしはすなほ。

寺てらの外そと廓くわくに石垣いしがきを築つくいてあつて、短みじい草かが石いしの合あ目めから隙すき間まもなく生はえて居ゐる。此この石垣いしがきは時とき々々蛇へびの  
あたまが出入でひりをする處ところで、山清水やましみづの滴した々りが北谷きたから  
流ながれて來きて、こゝで幅は二尺にせばかりの小川をがはになるが、  
まだ花はなの咲さかない山吹やまぶき、紫陽花あざさあ、毒どくだめ、車前子おほばこな  
どが流ながれの上うへにおつかぶさつて、下した行ゆく水みづの色いろは見みえ  
はせぬ。もう少すこし行ゆけばと、さう思おもつた處ところへ直すぐ着つ  
いた。

こゝぢやあ石垣いしがきも段々だん々々下さりに低ひくくなり、路みちも次第しだい  
落おちにくぼみになつて、路みちから川かはに下おりる石段いしだんが二ツ  
ある、二ツ目ふたの石いしにはサラ／＼と水みづがかゝつて居ゐる。  
山清水やましみづの此處こゝへ來くるまでは草原くさはらの野中のなかを潜くるので、  
愛宕あたごの麓ふもとから續ついた野のの末すえと寺てらの石垣いしがきとが合あつる場ばし  
所よ、山やまから來くる水みづが一段だん高たかいから一ひと畝うね水みづがうねつて  
落おちる、潺せん々々たる細流さいりゅうに、葉越はしにさして來くる月つきあか  
りで、この一ひと幅は畝うねつて落おちる水みづの色いろも透すき通とほる中なかで、  
翠みどりなす柳やなぎの葉はが一つひとかみ枝えだを沈しづめて、搔か潜いりまた浮うき  
上ある、ト一しよ緒しよにサラ／＼といふ音おと。米こめを白しろげて居ゐた

婦人があつたが、出合頭に桶を抱へあげると振返つてすれちがつた。

あれは花屋が内のをばさんだと思つて見返ると、裾をあげた、ならんで白い脛が見える後姿、かゝへた桶から雫がしたゝり、乾いた地の上へ絲を引いて、樹の下の細道一條月あかりに、ちやうど、蜘蛛の子が連つて走るやう。やがて其姿も、抱へた桶も、通つて來た寺の前あたりに、ものかげにかくれて消えた。

「直其處までだから、もうちつとあんよをなさい。

さあよ、さあよ。」  
額へあつたかな呼吸がゝゝるやうであたまが重くなつた。顔を差覗いて見るやうな氣勢がする。坊やは其恐い顔を見まいと思つて目を眠つた。

路はこゝから向つてやゝ廣く、爪さきあがりにも  
 高くなる。正面に仰がれた頂の鷲の翼は右へま  
 はつて、だら／＼坂は左の方へ登つて行く。樹の下  
 の徑は最う潜り抜けて出て來たので、坂なりに路を  
 右へ曲ると、さつきの水が眼の下に幽に青味を帯び  
 て暗いなかには有るのが、樹の根に挟まつて瞰下され  
 た。路傍は畑地で、物置であらう、藁葺の小屋が一  
 個、其屋根の上をあるくやうな處を通つて、ひろ／＼  
 とした處で、手を曳いてる人はこゝにある鬼子母  
 神様の御寺の石壇の下で立侍つた。  
 壇の上り口の右へ寄つた芝生の中に、題目を書い  
 た石の柱がすつくり立つ。

これからさきに人家はない。あたりは廣々とした  
 畑で、別に遠くこんもりした森がある、其處の其寺  
 は大破して、門の柱と境内に釣鐘堂の跡があるばかり、  
 不具の乞食が寝に行く處で。すつかり町を出離  
 れてしまつたから、一本松のなごりのほか、空を遮  
 るものはない。見渡すと、遙かにへだつた、ぬれ

た、しめつたやうな小暗い窪地へ、一面に刷いた霞に沈んで、萱葺の屋根が並んで三ツ見えるのは、鶯谿の尼寺である。

其尼寺へ行くでもなからう、寺の門は閉つて居る。これからさきへ行けば、不具の乞食の野宿して居る荒寺なり、聲を立てゝも聞えぬ處と、あたりを見ながらイんで居ると、題目を書いた其石柱の前途に、ほつとり草莓の實のやうな火と思はるゝのがふら／＼と動いて居る。さうして薄い、かすれ／＼な一脈の煙が月夜の中に纏れて居た。

視詰めて眼も放さなかつたが、人が居るのを認めたらから、あゝ、待つてるな、鬼のなかま。こゝへ連れて来て、これとい一緒に苛めようとするのであらう、と思つた時……果して石段をのぼつて近づきかゝる。

手を曳いてるのは、其のさつきの手といひ、また聲音といひ、引添うて居る衣のけはひ、ものゝ薫は女だから、待ち受けてるものゝ女房であらう。

待つてるものは男であつた。

帽を脱いで傍に置いた。うつくしい芝の上に腰を懸け、片腕をついて巻煙草を飲んで居る。足を石段の片端へ投出して居たが、しつくりした洋服で、皆黒いのに胸の眞白で艶々しいのが少し見えて、やゝ仰向けになり、ちやうど松を放れた中空の月を仰いで居る。横顔に葉越の薄ら蒼い光がかゝつて、色は洗つたやう、眉はあざやかな一體の人物は、あかい煙の中にあらはれた大理石の像のやうで、其折曲げてる手の袖の蔭さへ黒くさやかに見えたので。

鬼ではない違つたと思つた私と、手を曳いてる人は此方の端を歩行いて居たが、男の足を落して居るおなじ段一段上つて、モーツ上らうとして、

「失禮、」

といつて聲をかけて通つた。男はこれを聞くと少し身を起したが、立つて來はしなかつた。

恐怖は薄らぎ、疑は消えかけたが、黒い土、青い石の壇の數、五十ばかり上り盡して、担い石のやゝ廣い上に乗つて、見上げるばかり厳しい御寺の門に向つた時、くわつと暖い風に包まれたやうな氣がして、思はずわなゝいた。斑に木の葉の影が、掃き清めた石の上にほたゝと映つて居るのは、――あゝ、彼時の血のあとが消えないで居るのでないか。・・

鄰家の吉坊が殺されたのは、確か此處で――晩方で――殺したのは父上で――父上は氣が違つたんだつて、――もう餘りいろんなことを考へると、あたまがぐわら／＼といふからやめよう。

はじめは灯もまだ點さない薄くらがり、父上は御飯を喰べかけておいでだつた。其時・・・

（母様は、父上、母様は、父上。）といつて、坊やがまた溢り出した。いつもかういふと堪へられないやうな御様子に見えるのを、知つて居ないのぢや

あなかつたけれど、一度さういはぬと氣が濟まないから、其日もまたしく／＼泣き出すと、持つておいでだった箸を投げて、御膳を押し倒して、すつくと立つて、

（さあ、亡くなつた母様に逢はせるから、）ツて箆笥から刀を出して、矢庭に抜いておかゝりだつたあれといつて、暗い間の中をぐる／＼廻つて遁げながら、土間へ下りて、たそがれの戸外へ駈け出した。

沸上るやうな人騒ぎ、行違ひ折返してパツと大勢の分れるなかを、眞直に通つて、刀を振りながら追駈けておいでだから、一生懸命にいま手を曳かれて通つて来たあの路筋を、夢中で――こゝまで遁げて来た。

鬼子母神様は母様が一御《ご》信仰なすつた、さうしてあの佛様は小兒を守つて下さるんだつて、いつでもおつしやつたから、始終遊ぶのに来て居た處で、また皆が鬼子母神様のお乳だつていつて、門の柱がくしの鐵の釘のふつくりした圓いものゝついた頭を、戯れに吸ひ／＼した。

こゝへ來れば助かると思つて、石段を飛上つて、柱に抱きついたが、見返ると、あへぎながら帯もゆるんだ裾を煽つて、ひよろ／＼と壇を上つておいでの、ちらし髪がみの其血相そのけつさうといつたらない。

遙か離れて、だら／＼坂の下あたりでは、ワア／＼といふ人の叫聲さけびこゑ。烏が數百羽かたまつたやうな人の天窓あたまが重なり合つて、階子を立てゝ居るのがあり、鍬を振つて居るのがあり、哄こつとなだれちやあ寄せ合つて、また開いて、寄せ合つて、また開いた、群集ぐんじゆの中を潛り潛つて、人影ひとかげが躍ると見た。ハヤ石壇いしだんの眞中まんなかまで、あへぎ／＼、あへぎ／＼、眞蒼まつさをになつて、胸むねに波なみをうつた、頤おこがひのこけたちらし髪がみの、其の血相けつさうといつたらない。(お遁げよ！ 吉ちゃん) とまた此處こゝで二三人遊んで居た中の、一人の遁げおくれた鄰家の兒となりこに聲こゑを懸けながら、身を翻して、門もんのわきに何とかいふ俳優やくしやのたつて、古い大きな石碑せきひが建つてる其の背後うしろへ隠れたトタンに、四歳よつだつた吉きちのすけ之助のすけといふのが、門もんの扉とびらで頸髪えりがみを取つて、狂者きちがひの手てで押おしつつけられたのを見た。が、吉ちゃんきちちゃんは泣なかなかつた。父様おとうさんの顔かほは眞蒼まつさをで、こけた兩りやうの頬ほが窪くぼんで黒くろ

い。血眼で、わな／＼震へてながらニタリと笑つたが、沈着いて、突通して居たのを抜いて取つた。白刃と一緒に黒いものが胸から波を打つて溢れて出た。――其のあとは忘れたけれど――ちやうど其時とおんなじ状が、目のさきに見えるやうで、あたまがぐら／＼とすると倒れようとした。うしろで誰かゞ支へてくれて、

「しつかりするんですよ、いまね、母様に逢はせますからね。」と沈んだ、うるみ聲でいふのが聞える。

(母様に逢はせるから、)ツて然ういつて、また背を撫でて、

「此處にちつとしておいでなさいよ。おとなしくして母様のね、お名をね、しつかり／＼念じていらつしやいよ。さうするとね、母様が來らつしやいますよ、可ござんすか、駈出すんぢやありませんよ。わきへ行らつしやるとお目に懸ることが出來ませんから、可ござんすか。さあ、おとなしくして、ね、ぢつとしておいでなさい。さうすればね、誰も何うもしやしませんから、わきへ行つちやあ不可ませんよ。分りましたか、可ござんすか。」

と、うるみ聲で、身に染みるやうにいつて聞かしながら、やう／＼持つて居た手を放した。さうしてしばらく背後に立つて、様子を見て居たやうであったが、私は言はれたまゝ動かないで、ぢつとして、いま放された手を膝に下げた。

うしろでは人の動いた氣勢。一段二段、あともどりをしたやうだったが、しばらくして、

「それでは恐入りますが、」  
といふやさしい女の聲がして、風に乗つたやうな  
軽々とした裳の捌、柱の處にうしろ向いて立つて居  
た私とすれちがつて、ゆかしい薫があたりを掠めた、  
と思ふと、潛門へ白衣の、細りした姿が吸込まれた  
やうになつて入つて消えた。

恐々うしろを振り返ると、中段のあたりに、今度は  
腕組をした、細身の立姿で、洋服を着た人は月のな  
かに、うつくしくイんで、此方を瞻つて居るらしい。  
眞黒で艶のある影が段の上に横はつて居る。

其まゝまたうしろ向いて柱に凭つたが、釘かくし  
の乳でまたゾツとした。

幻がむく／＼とあのあたりで湧きかへるやう、其  
時のありさまが目に浮ぶ。吉之助の血だらけな小さ  
な身體が、扉の中で動いてるから堪へられない。

「母様。」

月の影は敷石の上に一杯にさして、自分の爪先、  
足と足との間も極めてあかるい。片足を踏かけたの  
であらう、段の中ほどでコトリといふ。

「母様、母様。」

サラ／＼といふ葉ずれがする。荒寺で焚火をしな  
がら、不具の乞食どもが車座になつて、私を連れて  
かうといふ相談を囁きながら、火さきに手を翳して  
居るやうに思つた。

「母様。」

寂然とする時、ねん／＼よ、ねん／＼よと唄ふの  
が、何處ともなしに聞えて來た。

ねん／＼よ、ねん／＼よ、  
坊やお守は何  
處へ行た。

山を越えて里へ行た、  
里の土産に何貰つた。  
でん／＼太鼓に背の笛、  
起上り小法師に犬

張子。

耳を澄ましてとなつかしい、優しい、清い、う  
らわかい、微妙な聲は門の内である。

と考へた時、磬音がしたやうで鐘撞堂の方へ行つ  
たけはひ。それから本堂の前を通つて、小さな松の  
木の間に潜つて、敷石の上へ出て、一つらね唄の果

てたときは直ぐ扉のむかうへ来て居たので、いま唄ひ濟ますとまた遠退いたのに違ひないやうに思はれた。

・・・・おらが姉さん三人ござる、

一人姉さん鼓が上手、

一人姉さん太鼓が上手、

いつちよいのが下谷にござる。・・・

さきとおなじ聲でうたつたのが、澄み渡つた調子でさえ、しく、しかもあはれに聞き取られた。

もう立つて居られなくなつて、ばつたり門の礎の處へ跪いて合掌した。

「母様。」

此時、恐しいことは忘れてしまつて、一度は血のあとだと思つて身震した、木の葉の影に膝を敷いて、――跪いて合掌して聞いた。

此の鞠唄は母様が大層お好だつた。あの姿で、久い間水淺黄の衣に襟のかゝつた、そんなに痩せおとろへてもいらつしやらない、その姿で、御寢つておいでの時は、唄つてお聞かせすると、嬉しさうにいつでも莞爾とお笑ひだつた。もう床にお就きのあとは、めつたに笑ひの出たことはなかつたから、いつでも其笑顔を見たいと思つちやあ歌を唄はうとするど、（外に何も樂はない。そればかりが慰なんだから、始終聞いて飽いては悪い。取つて置きにして大事にかけるの、）とさう言つて、一寸は唄はせて聞かうとはなさらなかつた。

覺えて居る。あの時と、あの時、それからあの時。

（寒いだらうにおなかゞすいて居ようけれど、何だか悲しくなつたから、頼むから唄つてお聞かせ、）つて、枕をしたまゝ此方をお向きだつた。

ほんとに寒かつた。さうしてがた／＼震へて居たけれど、枕の傍へ坐つて、冷いので覚えがなかつた手を、膝の上へちやんとついて、仰向いて聲を出さうとしたが出なかつた。また唄つたけれどふるへて居た。

（折角聞かうといふものを、）とお氣に障つたやうで、夜具の袖をぐつと口の上へ引いておかけなすつたから、堪らなくなつて、一心になつて、今度はじやうずに出來た。

すや／＼と目を眠つて、括枕に頬を埋めて、がツくりして聞いておいでだつたが、三度唄ひ濟ますと、パツチリした涼しい目の、瞳の大きく黒いのをきつと開いて、きつと見なすつて、

（良い兒だ。――坊やお守は何處へ去た、山を越えて里へ行た。・・・）と幽かな呼吸でおつしやつたが、其まゝ大變に咳をなすつて、くるりというしろを向いておしまひだつた。

ソツと背を撫でゝ居たがやう／＼静まつたから、おづ／＼顔をあげて枕越に覗いて見た。目に一杯涙をためておいでだつた。

父上は包を背負つて、雪の中を跣足で歸つておい  
でなすつたが、直ぐに勝手へ行つて御飯をこしらへ  
てたべさして下すつた。さうしてお茶碗をかへない  
さきに、父上は眞蒼になつて、母様の處へ飛んでい  
らつしやつたが、いま見た色もかはらないのに、ハ  
やお顔には白いものが懸つて居た。・・・

其のまゝ其時の其姿で起きて出て、子守唄うたひ  
ながら、寺の中を月あかりの木がくれに、うつとり  
しながら、あつちこつち、場を廣く取つて靜かに歩  
行いていらつしやるのが、鐵のやうな、錆びた門の  
扉の、厚い材木を透過して、しら／＼と映るやうで  
ある。其のうつくしい唇がまのあたり動いたやうで、

坊やお守は何處へ去つた、  
山を越えて里へ行つた。

と此時また聞いた、清らかな聲は、本堂に響いて  
裏の山の墓原をめぐつて、野末をまはつてこだまを  
返した。思はず聲を出して、

「おつかさん  
母様！」といった。

「あゝ、」

といふ聲がして、月をあびて、青みを帯びて練衣  
のやうな眞白な服装の、ほっそりしたのが、墨繪で  
描いたやうに潜門から抜けて出た。

「坊や、おつかさん  
母様だよ。」

「坊や、母様だよ。」

といつて、手を取つて抱いて下すつたのは、看護婦といふものゝ服を着けた、二十ばかりの女であつた。紅さしには、あの指環もはめて居た。白い布の帽を冠つて、黒髪は引緊めてうしろで束ねてある。うつくしい、ふツくりした、色の白いと見たばかりで、今度はさつきのそれとは違ひ、氣高さにおのづからうつむかれて、また顔は見られなかつた。

優しい聲で、

「私はね、私はね、私はあなたの母様よ。」

「もう可いのですか。」

「はい。」といつて、しつかり縋りついてた私を退けて、少い母様は立直つて手を下げて、靜かに彼の方の顔を見たが、

「はい、恐入りました。難有う存じます。ツイうつかりいたしましたして、まあ、眞個に私は。・・・」

といつて極のわるさうに莞爾なすつた。

「ほんとに御迷惑をお願ひ申して置きましたのでございましたつけ、まるで此兒に、「と私のつむりに手をかけて、故とならぬものゝいひやう。

「だもんですから。」

と口籠つてうつむくやうになすつた、横顔に月がさした。

男は眞直に立つて居る。兩手を衣兜にさしいれて會釋を返して、

「ちつとも迷惑には思ひません。茫乎徒然で居ました處へ、一役おあてがひ下すつたので。却つて結

構でございました。けれども唄にきくとれましたもの  
のと見えます、時々うつかりしちやあ八ツと思つて  
氣が着き、氣が着きましたのです。」  
彼の方は沈んだ顔色で、もの思はしげなしかし落  
着のある、ものいひだつた。

「まあ、あなた。」

「否、まつたくなんです、それですから、うつかり  
しツちまふもんですから、これはお兒衆にまた變  
つたことはなかつたかと、吃驚しちやあ見たんです  
が、可い鹽梅に折角のお頼が徒事にならないで、無  
事にまたあなたのお手に渡しましたから、私も安心  
をしましたよ。」

といひかけて、手の指を指でもんで、何か繼穂が  
ないやうだつた。私を見て、

「一體あなたのお兒様ですか。」

「はい、いゝえ、あの、」といそがはしくお言ひ  
だつたが、

「これは何でございます、先月の末でございますし  
た、施療院に連れられて参つた兒で。」

「道理で……左様ですか。」

私は聞いて、いまさらのやうに目を二つた。

「私は疾うから別になつて居りましたから、此兒は覺えては居ませんでせう。幼顔を知つて居りましたから、様子を聞きますと何でございますよ。

大變ものに吃驚いたしました時、氣が狂ひましたものと見えます。

現で熱が出ちやあ看病人の手を離れて、窓からでも何處からでも、飛出して遁げようとしみますので。

おさへられて仕方がなくなりますとね、母様々々ツて狂ふんですもの。よく聞き合はせますと、私が親どもの隣に居た方で、ツイ半年ばかりさきに母様が病氣でお亡なりになりましたさうですが、皆が左様申して居ります、大層な其の母様おもひで、あんまりな懐しがりやうをなすつた所為で。

父上と申ますのは、私ども小さな時からよく存じて居ります。眞に内氣な、氣のやさしい、それこそ蟲も殺さない方で、いまだに鬚を結つていらつしやつた。さういふ方ですから、舊は立派な消光をなすつておいでなすつたんですが、だまされたり、おど

されたり、もうね、おつれあひがお亡なくなんなさる時じぶ分んには、大層たいそうお困こまりなすつていらつしやつたんでございますツて。

お可哀相かはいさいうに、さうまで御不幸ごふかうの續つきましたのに、此このお兒こが何なんでございませう、口癖くちくせのやうに母様おつかさん、母様おつかツて言いふもんですから、お弱よわんなすツてついでねえ、取詰とりつめておしまひなすつたんでございますよ。

(そんなに言いふなら逢あはして遣やるから、) ツ  
て・・・

といひノ、顔かほの色いろが變かはつて蒼白あをみを帶おひて來きた。男をとこは幾度いくたびも顔うなづいて聞きいて居ゐる。

「私わたしはわけがございまして、」と少わかいおつかさんはいひ淀よどんで、彼あの方かたの顔かほを見みながら、一足ひとあしうしろへお引ひきになり、

「お産さんをいたしますと間まもなく・・・仔細しさいけがあつて小兒こどもに分わかれましたの。ー

それに乳ちが出でませんで、一度ひとも含ふくめてやりましたことはございせんのに、誰たれに聞ききますか、あの何なんでございまして。・・・」活發くわつぱつに身からだ體たいをかへして、わかにおつかさんは門もんの柱はしらをしつかりおさへた。

「これですよ、あの吉之助きちのすけといひましたのが、此處こゝへ來きちやあ、鬼子母神きしもじん様さまのお乳ちだつていひ／＼、この冷つめたいものを吸すつたんでございます。」  
お聲こゑもうるんで居ゐたから、かきむしられるやうで胸むねが痛いたかつた。男をとこは腕うでをしつかりと組くんで動うごかないで居ゐる。

「因縁いんねんごとでございませう。ちやうど此このお兒こを追おう

駈けてこゝへ父上がおいでになつたとき、暗くはなつて居ましたさうなり、私の坊やが此お兒の身代になりました。」

私は何うなるものかと思つて、おづ／＼天を仰いで見た。いつのまにやら空には月がよどむで居る。峰なる鷺の片翼は小形になつて瘦せたやう、もの淋しう寒さうに朧々として見えた。山の腰から畠へかけて一面の霞で、尼寺の屋根も何にも見えない。

「いゝえ、私はちつとも恨みやしません。」  
と、しつかりした聲で判然いつて、両手で顔をかくしておいでだつたのが、キツと立つて、やさしい手を背中へかけて下すつた。でないと、私はもんどり打つて、石段をころがり落ちて、何處へか行つたらうと考へる。

「しかし……」 とばかりで彼の方は溜息をついて黙つた。少いおつかさんはいと凜々しく、  
「いゝえ、私は決して恨みません。あゝいふ結構な方が氣の毒だツて言ひませんものはございませぬ。」

また人が何といひましたツて、私はこのお兒の心持が可哀相でなりません。情を知らないものももしございましたら、父上を狂氣にした、泣殺しに殺したといつて、このお兒を憎みませうか。．．．

私はさうは思ひません。可愛くつてなりません。

一たとひ、ひよんなことが出来ましたにしませうとも、母様を懐いかしがつた心持を考へますと、私も兒を持つて覚えがございましたから、まあそれほど慕つてくれたら、どんなに嬉しうございませうね。

寝ないで看病をしましたけれども、何うしても治りませんので、國手も手を放していらつしやいました。

未練のやうぢやありませんけれど、何うしても思ひきれませんで、せめて其殺されたあとでもと思ひましては、かういふ晩には此處に參つて、毎晩泣いてたのでございます。

そして考へますと、あつちではこのお兒がさうまで母様を慕つていらつしやる、此方は私がそれはもうお察し下さいまし、何んなに亡なつた兒が不便で

すか。・・・

亡なくなつた母おつかさん様を慕したつてる此このお兒こと、死しんだ兒こを忘わすれられませんか私わたしと、兩方じやうほうで、念ねんが通つうじ合あひましたら、此このお兒こが私わたしを母親はくおやだと思おもひませんことはござんすまい。私わたしはもう眞個ほんごの兒こだと思おもひますから、國手せんせいにさう申まを上げて、いろ／＼なしるしのあります、此處こゝへ連つれて參まゐつたのでございました。

路みちでも幾度いくたひ駈出かけださうとしたか知しれませんが。またそんなことをされてはと、存ぞんじました處ところへ、ちやうどあなたがおいで遊あそばしたもんですから、お目めにかゝりますなり、神様かみさまか佛様ほとけさまが、ちやうど待合まちあはせて居ゐて下くだすつたと、そんなことを思おもひまして、失禮しつれいな、飛とんだことをおねがひ申まをしました。そしてまあ、あなたの見みていらつしやる前まへで芝居しばいじみたことを、いまさらほんとうにお恥はづかしい。」

とまた顔かほをあからめて、

「此兒このこに面めんじて、あなた、」といつて、吃きつとまおもてに彼あの方かたの顔かほを瞻みまもつて、

「笑わらはないで下くださいませよ。極きまりがわるうございませ、ねえ、坊ばうや。」と、へだてなく然さうお謂いひだつ

た。

堪たまらなくなつて、わツと泣なき出した。

男をとこは近ちか々／＼と寄よつて、少わかいおつかさんと、私わたしを隔へだ

て、右みぎ左ひだりに並ならんで立たつて、つむりをなでながらし

つくりした身からだ體だを曲まげて、顔かほを覗のぞいて見みて、沈しづんだ、

威あのある、品ひんのいゝ、うつくしい顔かほで莞こつこり爾りなすつた。

「坊ぼちゃん、鹽あんばい梅ばいは何どうだね。え、（一人ひとひとり姉あねさん）

は唄うたへますか。」

何どうして唄うたへますものですか。

「矢や張はり、ほんとうにはなほりませんか。」と少わかい

おつかさんは氣きづかはしさうに、うるんだ聲こゑでおい

ひなすつた。

否いうたへますとも！

震へる手をしつかり揃へて、膝の處に垂れて、寺の門を背後に、おぼろにかくれがちな、鷲の片翼に向つて、いと高い石壇の上に、小さな身體を突立つて、いざやと、口をあいて、うつくしい花の薫がする風をヒヤ／＼と吸つた。

これを見ると、男の方は靜かに離れた。少い母様もしのびあしで其後について、一緒に私を隔つた處へ行つた。様子を見るのであらうと思つて、いま彼の方は黒い姿の、細りしたので芝に腰をかけ、少い母様が引添うて、くらべると、やゝふツくりした白い姿で此方をみかへつて動きもせぬ。二方の氣高い、品のある、然も優しい姿をぢつと見た、二つた目に一杯涙が溜つたので、松の名残はもう消えたが、まのあたりにあの時のお姿が見える。

父上へはお詫のつもり、また母様に聞かすのだと思つて、ちやうど其の晩枕頭で唄つたとおなじ心で聲をあげた。

・ ・ ・ ・ ・ 一人姉さん鼓が上手、  
一人姉さん太鼓が上手、

いつちよいのが下谷にござる。 ・ ・ ・ ・ ・

唄ひ果すと眠はうるんで、ものが見えなくなつた。  
兩脇からぐツと手を入れて胸で抱かれたと思ふと、  
足は空になつて身體が宙になつた。

「あれ！」と少い母様が悲しい聲をお立てなすつたのを聞いたばかり。

涙も乾いて、髭だらけの、色の青い、細面な顔を見ただばかりで、俳優の石碑の蔭になると、躍り上つて竹垣を越える。

トタンに暗くなつてざわ／＼といふ烈しい音。寺の竹藪を押分け／＼、搔潜つて大跨に走つたやうだが、ぼんやりあかるくなつたと思ふと、墓原を出たのであつた。

卵塔のあひだを彼方へ抜け、此方へめぐり、塔婆の間を縫ひながら、ひら／＼と黒い男の影法師。心

も空になつてゐる間に、また一ツ垣根を越えて、小溝を躍り越すと、幅の狭い、草の短かな晩方のやうな坂へきた。

ちやうど弓形に大まはりにまはつて來たので、此坂は、彼の石壇から續いて居るので、荒寺に行くのだと、攫はれてながら覚えがある。

「あをつでねえ、あをつでねえよ。」

と此處で一聲懸けたきり、小休みもしないですた／＼驅ける。

背後から細い糸を曳いたやうに、意味の分らぬうらがなしい女の聲が聞えて達く。

「母様、母様、母様。――」

「叱、」といひながら、蹈留まつた乞食は後を見返つたが、得物を宙で抱きかへて、またさつ／＼と上つた。

やがて崩れた土塀と、横倒れになつた板塀と、兩方から迫つて、朧夜の坂を狭うした入口一間ばかり、中には大木が茂つて居て、空へ隧道をぬいたやうな眞暗な處で、一杯になつて入らうとするが、横抱に

されて地にもつかず、ぶら下つた足は棒のやうになつて力が入つて、其土塀の端に蹈支へて争つた。

「可いてことよ、可いてえとよ。」と、まはして縦にした身體は細くなつて、暗い中へ落ち込んでしまつたから、ハツと眼を眠つたが、吃驚してあけて見た。

鐘撞堂の柱が三本残つて、一本は斜めになつて居るのが咄嗟にはつと見える、・・・焚火がしてある。

さつきも何となしに、こんなことを幻のやうに胸に浮べたが、果して乞食に攫はれて來たのであつた。こゝで攫はれたものが、荒寺の經机の上で、腹を屠られて、手足をぶつく切にされて、油であげられたといふ、實際さういふことはなかつたけれど、さうまで恐ろしい處であるやうに、幼いどしは思つて居たので。

焚火の傍で手から下された時は、もう起きること

が出来なかつた。いま攫はれた途中抱かれたまゝの  
姿で、冷い土の上へ、草を枕に大木の下で、なよ／  
＼として綿のやう、つかれて力なく横になつたまゝ  
起きないで居た。

一體この市では北の町はづれと、町中の橋の下の  
河原と二ヶ處、非人の救小屋が建つて居て、慈悲深  
い人が三度づつ賄つて遣つてるから、大抵は皆救は  
れて、果敢い露命を繋いで居る。其小屋には入らな  
いで、夜々此處へ来て屯をするのは、いづれ残忍不  
頼な者ばかりだと聞いて居たが、待て何かいふ、囁  
く聲がする。

十四

囁く聲が焚火のあたりで聞えるのを、地に横はりながら、其の焚火に背いて、眼をふさぎ、殆ど意味なしに耳を澄ましたけれども、よく分るほどには聞えないで、却つて、ノツホ！ノツホ！と樹から樹、樹から樹で呼びかはす梟の聲がよく聞える。それが耳に透つて天窓にひびいた。大方囁くよりも鳥の方が大聲だつた所爲であらう。

たとへ聞えないでも、攫つて来たものをかうして置いて、いづれ旨い相談をするのであらうから、いまに刀が焼火箸か身體にさはる其時はと、また引入られるやうになつて、しばらく茫乎したが、此森の、うしろには、地を掘つて藁屋根かけた、雪を貯へて置く氷室がある。

大きな、眞白な山へ多勢わらぢがけで上つたり下りたりして居た。勢揃をして、畚に雪を入れて二人で擔いだのが、行列をして、いまに小屋をかけるといふ、其雪の山へ蟻がたかつたやうに上つちやあ積

んでたつけ。

とさう思ふと寒くなつた。ゾツとした耳に今度は、うむ！といふ呻吟いた聲がする。續いて大きなものゝ寝返打つた氣勢で、あとで又、うむ！といつて、森とした。

梟は間を置いては鳴いた。

「何うした、何うしたんだ。」といつて、胸へ重味がかゝると手が乗つた。大きな獣の毛むくぢやらな、ふツくりした掌でおさへられたやうで切ない。

「死んだ眞似して居らあ、伶俐だな。獅子に喰はれさうになつた唐人の昔話でも聞いたんぢやあねえか。」

といふ聲は以前のでない、これは違つた奴であらう。とん／＼と二ツほど胸を叩いて見て、

「わかい兎のやうだ。こいつ和らかさうだぜ。」といひかけて、胸を搔分けて乳から乳へ一杯になるやうな手を入れた。いつしよに掌が顔の上へおつかぶさつて、呼吸をうかゞつたやうである。

動悸は分銅の躍るやうに突上つて、思はず足を縮めた。手は其まゝで、些少も動かないでぢつとし

だが、また向うの方で、うゝうゝと呻吟く聲が、沈んで地を響いて來たと思ふと、ぐわツ／＼と犬が水を飲んだやうな音。

梟が鳴きはした、更に森とする。

「はゝゝゝ、矢張狸だ。怯えて氣絶をしてしまふたかと思つて、大きに打つた。かう、何うせな、食はれるもんならしつかりして立派に食はれるよ。

汝、父親にまで刃物で迫懸けられた兒だ。少えたつて大概度胸は据つてる筈ぢやあねえか。立派になれよ、これ、汝のやうなのがいまに豪くなるんだぜ。松の数も潜らねえで、いろ／＼な思ひをしたなあ。其度に少とづゝ膽玉が太るのさ、喜んで可い位なもんだ。」

といつてまた叩いた。

「起きろ、起きろよ。此方人等、狼だ、虎だ、獅子だ。死身は食はねえから、さあ、ちやんと、突立つてくれ。」

鐘樓の下には櫓の火が燃え残つてふすぼつて居た。火影にすかすと、頬被をしてるが市で見かけたこ

とがあるやうな、かつたゐの乞食こじきで、

「さあ、立たつた、立たつた。難有ありがてえな、かうしつか  
りしてくれた處ところで、一ツ見みてもらひたいのがあるわ。  
待まてよ、」

「いまに何ぢや、しばらくだから我慢をしての、  
膽玉を据ゑて一つ見てくれる。」

いひかけた木下蔭の乞食は、暗まざれに寄つて彼の櫓を取つてぐツと突いた。おきになつたのがほろ／＼と崩れたのを、引上げて一ツ振つて、呼吸を吹きかけると、ひら／＼と燃え出した。其まゝぐツと差上げる。この乞食の汚らはしい、汚いのに驚きはしなかつた。

が、燃え立つた櫓のあかりで、頹破した本堂の下に仰向けに身體を倒した男があつた。流るゝやうな血の上に、泥まみれで、頤のこけた、眼の窪んだ、髪を被つた眞蒼な顔で、くひしばつた皓い齒からたら／＼と紅が出て、唇に染んで居るのを、炎のひらめくまに／＼浮上つたやうに認めた時、まだ手と足とが動いて居た。枕もとの杉の節穴から縁の下、椀だの、皿だの、筵の上にまだ二三人、男と女と一所のなど、これは無事に寝て居ることまで、まあ！よくまあ見た。

乞食の手にした櫓の燃えさしは、風が吹くともな  
くゆらめいて、黒い顔で眼を光らして、頬被の下か  
ら覗いて、中腰になつた片膝についた手が震へた。

「汝にやあ、恩のある男だ。親だといつてもいゝ  
奴ぢやな、よく見てやつてくれたな。」といはれた  
時は、もう背向になつて、兩掌をしつかり顔にあてゝ  
俯向いて居た。

「あゝ、坊ちゃん！」

抱くや否や鋭い聲で、

「何をするのだ！」と屹といふ。少い母様と居た、  
あの男の聲。――私はよみがへるやうな氣がして縋  
りついて顔を見た。さしむけた櫓が眞白な顔にうつゝ  
て、眼のあたり、頬あたりの薄紅がさして居る。男  
の顔を一目見ると、パツと地の上へ投げつけて乞食  
は炎を消してしまつた。また暗くなつて森とする。  
梟の聲は絶えず聞える。人々の息もかすかに響く。

乞食はやゝあつて落着いた聲で、

「ーえ、御免なさつて、御無禮でござります  
が、あなたは司様とおつしやる、高等とやらいふ學  
校の先生様で、あの文學士でいらつしやりませうな。  
はい、此方人づれにお名告り遊ばしはしますまい。  
宜しうござります。よく存じて居りますで、お見  
懸け申して、些少其の是非お願ひ申したいことがご  
ざりますので、故と失禮をいたしました。」

何、もし、あなたや、お嬢様が、見す／＼見てい  
らつしやる前で、其お兒を攫つてまゐりました處で、  
何うしますもので、殊に鬼子母神様の前からは、道  
なら二町とは参りやせん。」

いまにも追懸けて来て下さりませうと、實はお待  
ち申しました。

それから、其お兒を攫つて参りましたのは私では  
ござりません。實は其お兒には縁のござります恩人  
で。」

あの方は一足進んで出た。私は耳を敬てた。

乞食は一呼吸したが低聲になつて、

「恚うばかりではお分りはござりますまい。全く  
其お兒の身代になつて殺されましたのは、決して其

の、あのお嬢様ばかりの兒ぢやあござりません、で。  
何處にか、女ばかりで對手のねえ兒てえのが、ね  
え旦那。父親といふのは此方人等のなかまで、三て  
え奴で。

こいつが其の不心得な奴で、生れた時から疊の上  
ぢやあござりません。こいつが其の不心得な奴で、  
ツイしか人間並のものをくつたことのねえ、こいつ  
が其の不心得な奴で、三十面さげるまで嬉しいといふ  
思をしたことのねえやつで。こいつが其の不心得な  
奴で、花がきれいだやら、お月様がうつくしいや  
ら、馬糞が汚ねえやら。

こいつが其の不心得な奴で。あのお嬢様にツイ、  
こいつが其の忘れることが出来ねえで、其のこいつ  
が不心得な奴で。生靈でござりませうか。秋になり  
がけのことで、お嬢様がわづらつて其の蚊帳の中に  
寝ていらつしやる、裏木戸が開いてましてな。

何誰も留守で、枕許にや幽に灯がともれてをりま  
した。お庭から薄の中を潜りやあがつて、縁側から  
蚊帳越に其の、此奴が不心得な奴で。地體、大聲を  
お出しなさるやうな御容體ぢやあござりませんのに、

こいつが其その、こいつが其その不ふ心こころえ得え、不ふ心こころえ得えな。

お嬢ぢやうさま様さまは夢現ゆめうつしでござりませう。近所きんじよぢやあ、内々ない／＼風説うはきをいたしましたさうで、四年ねんさきに産うまれましたのが此このお兒この身代みがはりになりました、因果いんぐわもの者ものでござります。「といひかけて溜息ためいきを吻ほッと吐ついたが、焚火たきびの前まへに、頬被ほゝかぶりした黒い乞食こじきはうつむいた。

十七

「あまりにお綺麗で、それはハヤ怪しいまでの御容色よし、お心立も其通り、山が近いから怪しいものが魅入ったのであらうと、御病氣の内からさへ風説をしてをりました。お産があつては尚ほのことで、廣い國にもまた一人ないやうな方が、身二つにおなりなさると、直に病院入りをなされました。まだお年なら十七や十八そこらでな、旦那、看護婦ツていやあ、汚ねえものをあつかふだけが、損なお比丘尼だつていひまさあ。どんなお心持でござりませう。

あまり冥罰が怖い、一度汚れたお身體でござりますから、もう御本人はおかたづき遊ばさぬといふ御覚悟にちがひない。

施療院で勿體ないものゝ取かたづけまでしていたゞいて、生命を助かつて歸つてから、つく／＼後悔をしやあがつて、あゝ、身體の汚れたのを思召して、病人のおかはなんざ、何の苦にもなさらぬ様子。

勿體ない、罰のあたつた、まあ、せめてといふ氣で、不心得な親の敵でもさがす氣で、これをといふ

のをさがしましたが、何のござりませう。

類のねえ奴に酷い目にお逢ひなされたゞけ、この  
廣い國にもお嬢様にお似合ひ申したといふ對手の  
野郎はものゝ缺らも見當りませぬ。處が、先々月か  
ら此地へお出でなされましたのが、旦那、あなた様  
でござります。」「

といつて、急にまた言つた。

「何卒、何卒まづお聞き下さりまし。三の野郎生  
命でも拾つたやうに躍つて、喜びやあがつたが、八  
や、何が何ぢやゝら手のつけやうもござりませぬ。

すると滅法なことがはじまりました。一件でござ  
ります。

因果の塊でも兒と思召せばこそ、お嬢様が毎晩お  
寺の門まで来ちやあ泣いていらつしやる。

これを其の三の野郎め、此奴が其不心得な奴で、  
お題目の石碑のうしろへかゞんぢやあ、勿體ねえ、  
目も潰さねえで見てをりました。

ちやうど半月あまり、二十日めの今夜でござりま  
す。何といふお引合はせやら、旦那、あなたと一緒  
におなりなされて、何か談話をしていらつしやつた

のを、野郎ねらつて来て、さあ、占めた。」

乞食は軽々と手を一拍。

「いよ／＼おなかうどが出来さうだ。こゝを遁がすな。あのお方さへ取持つたら、お嬢様からおつりが来よう。

死ぬのはわけのないこつた、生命を棄てゝ頼むとするか。あなたは否とおつしやるまい、まあ、考へるとか何とかおつしやる、そろ／＼ものになりけるか。

こゝで面倒なはあの疵で。

知れずには濟むまいに、父なし兒を産んだでは、以ての外でもものにはなるまい。

此方から打まけて、お嬢様さへまだ御存じない、かつたゐが名告つて出よう。

とこんなわけで。其此奴が不心得な奴で、坊様をさらつて来ると、下にも置かず、毒を飲んで死にました。

いまに貴方がおいでになつたら、私から願つてくれ。

蛆でも、蟲でも生命がけだ。いふことを聞いて、

あのお嬢様を可愛がつてあげて下さりませぬか。

とハヤ不心得な骨頂で。が、どんなに旦那は我ア折つて肯入れて下さらうにも、一度此方人のやうなもの指のさきでも觸つたでは、それこそ傍へもお寄せなさりはしまいに困つて、死んだあとでも此汚い身體はお目に懸けちやあくれるな。見ぬこと清しだ、御覽にさへならなけりや、唯あとのないしみばかり、何うにかまあ、御承知下さるわけにはまゐりませぬか。尤も、野郎が死ましたことはわざと坊様に見て頂きました。ねえ坊様、唯た今こゝに此後に死骸がのたつて居りますが、あなたのお目は汚しませぬ、ハヤまことに不心得な。」

といつて聲をのんだ。あの方は黙つて居る。

鼻が、  
.....

「坊様、おまへ様、吃驚してよく見て下さらねえと駄目だと思つて、人の斷末魔におどけた眞似までしましたに、確に死んだと、えゝ、一言おつしやつて下さりまし。」

「あの.....」

「眞個なんか。」

「あゝ、」とふるへながら私は言つた。

「ありがたうござります、旦那、もし、これだ。」

そして御婚禮がきまりましたら、これへ何卒しるし

の松を一本植ゑて頂きたうござりますやう、くれ／＼

も申して死にました。この、不心得な奴が、南無

阿彌陀佛々々々々々々、と續けざまに唱名したが、

果はブツ／＼と口の中に消えて、鳴きかはす梟の聲

よりも低くなつた。

「母様、お手紙。」

といつて威勢よく、司さんの封書を頂いたのを、しつかり持つて、病院の・・××番室の戸を押し入つたのは、ちやうど其時から半年経つたあとで。入る時戸とゝもに突放した、赤い緒の上草履が向うへずる／＼と、辻つて、寢臺の下へ轉がり込んだと一緒、走りついて少い母様の前へ立つた。

「母様！」

日中だけれど、暗いやうな、廣い室の一隅に寢臺を置いた上に、白い衣服を着た病人が仰向けになつて居た。夜具の襟が其の唇までかゝつて、黒ずんだ、やつれた頬と、尖つた仰向の鼻とばかりが見える。額にはひつたり氷囊が乗つて居る。少い母様は其處に立つて、片手の脈を取りながら憂慮はしさうにしておいでだつたが、そつと見返つて、

「彼方へ、」と素氣ないやうにおつしやつたから、あとずさりをして扉へくひついて呆れて見て居たが、氣がついたから音のしないやうに戸外へ出た。

私は司さんの家に養はれた。少い母様も、嬉しい土産を持つちやあ一寸々入らつしやるし、此方からも毎日のやうに來たけれど、ツイまだ一度もかういふ顔をなすつたことはない。其は私がこんなそゝつかしい事をしたことが無いからで。

熱の烈い、ものを言つちやあ悪い病人の傍で、騒ぐのはよくないことを知つて居たのに、其の日はあまり嬉しかつたので、些少も氣が着かなかつた。

恐らく父上を狂氣にしたのもこれほどぢやなかつたらうと思ふほど、間がな、隙間には荒寺の杉の根へ、松のしるしをたてることを催促して、

(母様は何時、母様は何時入らつしやいますの、) てつちやあ、司さんをねだつた。司さんはあまりものをおつしやらない、いつも沈んだ方だつたが、これを聞きたび莞爾しちやあ、

(お前其では父上を氣違にしたではないか、私までは御免だ、もう堪忍してくれ、) つて、いつもおなじことを言つておいでだつたが、何でも一月ばかり前からぶら／＼病で、學校へも入らつしやらないで、ファイと出掛けたり、いつになく朝寐をしたり、

時々故とらしく笑つたり、急にまた沈んだり、ばあやなんぞ大變に案じて居た。で、そんなに御氣分がお悪い時でも、少い母様が間を見て一寸おいでになると、私も一緒に冴々しうなつて、其の時ばかりはちつとも御容子が悪くない。

だからまた、

（母様は、母様はいつ。）とさういふと、おなじやうに、

（お前それで父上を氣違にしたではないか、私は御免だよ、堪忍しておくれ。）

これでかはらず日が経つた。このあひだから、何でも夜中に起きちやあ少しづゝものを書いて入らつしやつた様子。

あたまを押へちやあ筆を持つて、其の時ばかりは、ソツと襖をあけて覗いても氣のついたやいつな氣色はない。何でも手紙のやうで、それが凡そ三晩と四晩で一丈あまりにもなつて居たかとおもふと、あくる日はほんの三寸ばかりの短い處でおなじやうに考へていらつしやる。また伸び、また縮み、いつでも

眞夜中頃、風が吹いて烏が鳴く時だった。けふ晝頃私に手紙を渡して、これを母様の處へ持つておいでッておつしやつた。

お顔の色はいつか石壇で見た時と變らない、うつくしい、品のいゝ、そして威のある、其時はサラリとして、屈託らしい御様子は見えなかつた。

(そして母様はいつ、)

(お前それで父上を氣違にしたではないか。私は御免だよ、堪忍しておくれ。)とさうはおつしやらないで。

まあ!

(手紙を見せたらね、直ぐ歸に母様と二人でいつて、しるしの松を建てゝおいで。)とおつしやつたんだもの。

御機嫌を損ねたつて、いまに! と思つてる處へ、廊下を曲つて出た赤十字の看護婦が二人。一人は少くつて背の高いの、一人は中婆さんで、でつぶり肥つたの、これはいま來がけに母様が××番に入らつしやるを教へてくれた人で、二人つれだつてちよ

こノ、走りに突きあ、うて、追懸ける、遁げるで、  
急いで来たが、齊く私のつむりを撫でる。

「お目出たう、」といつて、其まゝ××番へ入  
つた。

入違ひに少い母様は廊下へ出なすつたが、いはれ  
ない嬉しさが溢れてる、おつとりした、そして澄ま  
したお顔で、

「お手紙だつて、」

「はい。」

と渡した。お受取りなさるが早いか、

「此方へ、」とばかりいひずてにして、小走りに  
廊下をさきへ立つて、お部屋へ入らつしやる。曲角  
で追ひついて、

「そして、」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そして、あのすぐ一緒に行つて、しるしの松を  
建てるんですつて、」

釘づけになつたやうに、片足踏出したまゝお立ち  
なすつた。が、思ひ出したやうにまたあるき出しな  
がら、ふりむいて、

「あいよ。」

かういつた此この時ときのお顔かほといふものは、私わたしがいふつになつて世よの中なかが何どうなつてからも、またモ一度ど俯おもかげばかりでも見るみことの出来できぬことゝは、あゝ思おもひ懸がけなかつた。

すぐ部屋へやへ行いつて、机つくえとならんだ針箱はりばこの上うへで、其そのお手紙てがみをお讀よみなすつた時とき、私わたし蒼あせくなつて、あの時とき、その晚枕ばんまくらもち許こで、（一人姉ひとりあねさん）をうたひ果はて、ソツと覗のぞいた時ときの母様おつかさんとおんなじ、些ちつと少ちもかはらない面おもて色のち、少わかい母様おつかさんを見みたのである。

「お前はまた父上おつかさんを。」とおつしやつて、片手かたてで押おされたから、胸むねをいたんでよろけかゝると、あわてゝ、縋すがりついて、引寄ひきよせて、抱占だきしめて、膝ひざの上うへで横よこにして、頬ほと頬ほをおあての時とき、見みる／＼一杯はいになつて居あた涙なみだが、ハラ／＼と一御ひとぐしの亂みだれとゝもに冷つめたくしつとりと落おちた。

「お前まへはもう父上おつかさんツていふことをいつちやあなりません。今度こんどは父上おつかさん々々ツておつしやるとね、母様おつかさんを氣きちがひにしてしまひますよ。」

手紙の中に、

．．．折に感じておんまへ様をわがなき母  
上ぞと思ひ候心は、劣らず母なつかしむこの兒なら  
では汲み知り候まじ。一度母上ぞと見參らせ候もの  
を、かやうに思ひなり候ては、自殺して果てし心う  
つくしき荒寺のかたゐよりも、なほかつ淺ましく候  
まゝ．．．

少い母様は、今でも生きてはいらつしやるけれど  
も。

【完】